

昭和 10 年代の父島大村 —島民の日記を通して—

石井 良則（小笠原歴史研究会）

要 約

父島扇村出身の島民が昭和 15 年（1940 年）に書いた 1 冊の日記帳の具体的な記述を通して、昭和 10 年代の島内の出来事について振り返り、戦災に遭う前の大村、主として東西両町の生活風景について推考した。また、当時の大村における水事情についても日記の記述から推察した。

I. はじめに

父島扇村出身の島民（以後 A と表記）が昭和 15 年（1940）に書いた 1 冊の日記帳を通して、往時の島内の出来事について振り返る。20 歳で夭折する直前に書かれた日記のため、その記述は療養先であった大村東町の自宅周辺に止まるが、昭和 10 年代の島の実生活を体験していることから稀少な証言資料となっている。病勢が進行する中でも努めて冷静に物事を考え、出来るだけ積極的に生きようとしている彼の真摯な態度を読み取りながら、戦災に遭う前の大村、主として東西両町の生活風景を推考する。

日記帳は市販品で総頁 285、表紙に「昭和 15 年朝日日記、紀元二千六百年」と印字されている。巻尾に住所人名録、紀元二千六百年奉祝記念事業、国家総動員法、支那事变重要日誌等が添付されている。奥付は「昭和十四年十月一日印刷、昭和十四年十月五日発行」とあり縦 19.5 cm、横 12.5 cm、厚さ 2.5 cm である。保存状態は比較的によい。各頁は縦罫 12 行、片側に月日、曜日、旧暦が印刷され、ほぼ全頁にわたって記述（図 1）がある。

この日記帳は筆者が小笠原の昔話を採話中に島民から借覧したもので、他に香典帳と写真帳がある。香典帳は A の葬儀の際の金品受付簿で商家の大福帳のような体裁になっており、和紙に葬列の席次や金品、また来場者の姓名が墨書されている。これは日記に登場する人名の確認に役立った。写真帳もまた市販品で、縦 19 cm、横 27 cm、厚さ 2 cm である。主に家族や友人の写るものが多く、そこに映し出されている風物は暮らし向きを知る上で大いに参考になった。

小論では遺族の許可を得て日記帳を拠に昭和 10 年代の大村を中心に、A の眼を通して見

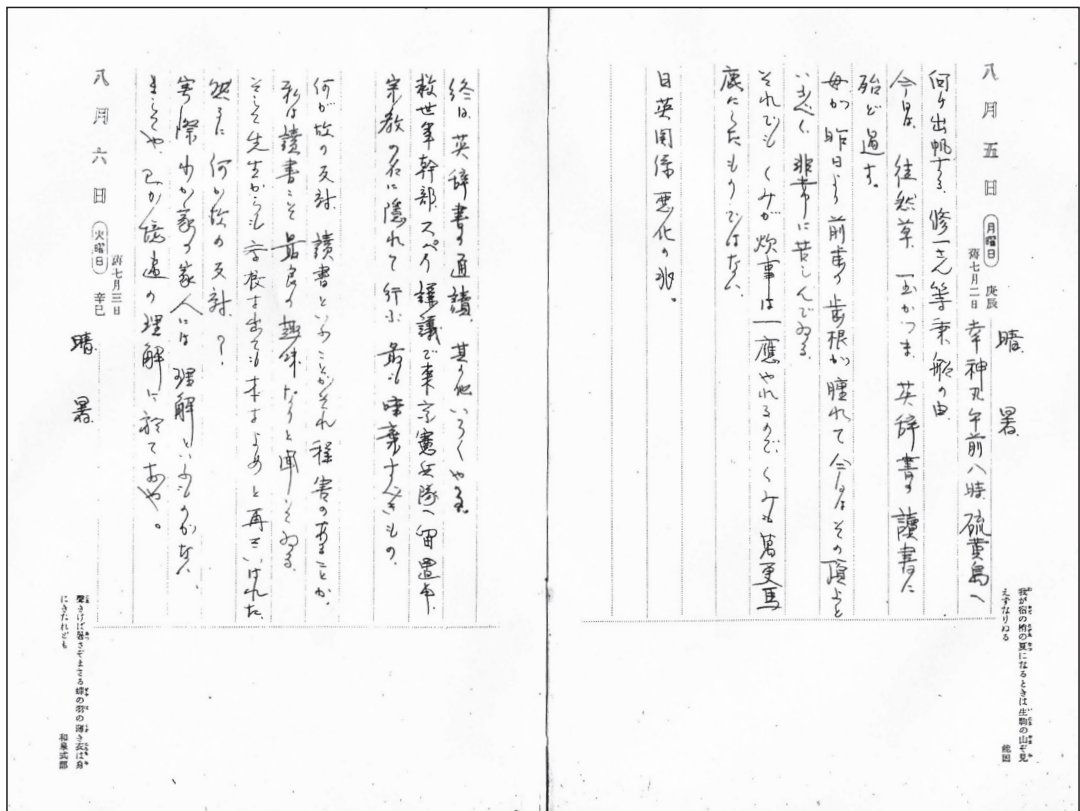


図 1 A の日記の一例

た人々の生活の様子を振り返ると共に昔時の街並みも推考する。研究の動機は、筆者が平成 3 年（1991）に小笠原小学校教員として在職中に、授業で大村市街の移り変わりを取り上げたことが糸口になっている。現在と戦前の集落景観の違いを調べる学習時の参考資料として A の書き残した日記内容を検討する中で標記の課題を設定した。

Ⅱ. 大村市街について

1. 東町と西町

A の家族が東町に移住してきた頃は復元図（図 2）で見るような集落であった。明治 33 年（1900 年）8 月より土地整理を断行した小笠原島庁は、それまであった 422 の旧字名を簡潔に改めた（小笠原島庁、1888）。その結果、大村は大根山、船見山、境浦、旭山、屏風谷、夜明山、奥村、釣浜、清瀬、宮ノ浜道、宮ノ浜、三日月山、東町ならびに西町（網本、1903）の 14 の新字名をもつに至った。A が日記の中でよく言及する地域はこのうちの奥村や三日月山、それと東町である。『小笠原島誌纂』（小笠原島庁、1888）によれば大村は「大村橋ヲ界トシ西町東町トス」とあり、奥村寄りを東町と呼び、その清瀬方面に行く隧道

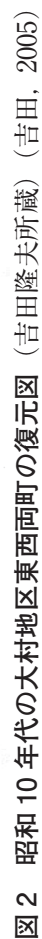




図 3 昭和 17 年、父島の吉岡健児
陸軍少尉、市川南進堂写真店
(吉岡健児所蔵)

付近に A の家宅があった。「西町は欧米系島民や官公吏が比較的に多く住み、それに比べると東町は一般の島民住宅が集中し、その間を通る往来の両側に商店街があり、海岸沿いに魚市場や造船所、倉庫、工場が並んで建てられていた」(山崎、1982)といわれたように、両町の境目付近に村役場、警察署、学校、郵便局、裁判所が立地して村落の中核を形成し、続く山側に支庁や要塞司令部、官舎群が広がっていた。昭和 17 年(1942)に着任した父島重砲兵連隊の吉岡健児陸軍少尉(図 3)が、「大村は定期船の寄港地で官衙の集まる首部だ」が、その一部を形成する奥村はなお「棕櫚芭蕉が叢生し、帰化人の洋風家屋数軒が其の間に点綴し、来遊するものを恰も異国にある感を抱かしめる」勝地で、未だ「明治の開拓期の風情を残している場所であった。」と指摘している。

更に吉岡は筆者宛て書簡(吉岡、私信、1996)に山崎の説明を敷衍するかの如く「休日には巷間に歩兵、工兵、砲兵が溢れるので第二種巡察が行われた。船見山の大隊本部から出発した私はこれより要塞地帯という揭示のある丸太 2 本の突き立つ門を出て、軍紀風紀取締りに出掛けた。要塞司令部前を過ぎ憲兵隊の所を左折すると間もなく官庁街が現れ、そこには警察、郵便局、村役場があった。左の山の手には支庁があり、そちらへ曲がらず直進すると本通りになる。右手に鬱蒼と茂ったタマナの木に囲まれた大村小学校の木造校舎と講堂、それに運動場が現れ、続く道の両側に雑貨屋、小料理屋、床屋、旅館等が並び、土屋百貨店という名前も見た。色々な小店が波止場まで続いていた。」と述べ、他に日本聖公会聖ジョージ教会や浄土真宗久遠寺、顕本法華宗法蓮寺、あるいは市川南進堂写真店の印象も語っている。第二種巡察とは要塞司令部命令の将校巡視であり各部隊持ち回りで実施されていた。この後で彼は白山芸妓屋の三浦家が進出していた二業地の境浦(浪江、1961)を経て扇浦も一巡している。

A の父親は千葉県出身で、大正末年に入植地の扇浦から大村東町に移転して、帝国生命保険株式会社(1888 年設立、現朝日生命相互会社)の代理店や代書業、養鶏業、質屋、貸金業、古物商等を営むとともに傍ら大村村会議員も務めるなど手広く事業を展開した人物であり、かつて制限選挙下の多額納税者として国政の選挙権も保持していた。そういっ

た多忙な父親を支えながら、長男であるAは体調の許す限り家業に並々ならぬ熱意をもって取り組み、例えば各種仕様仕分書や見積書の代書業務の手伝いから養鶏の仕事、生命保険の月例報告書作りに精出す日々を送っている。

彼は相当に筆まめな青年で、家計簿や養鶏日誌等も手がけ時に産卵グラフや鶏舎、あるいは家具の設計図も作成している。それはほぼ数日おきに文書作成の日記記事があることから判然とする。例えば任意に3月を参照すると、「七日、木曜日、午前十一時芝園丸東京より入港する。午後二時頃迄、新聞読んでゐる処へ林さんが例の書類持参したために、夕刻四時より内訳明細書の方に取掛り夜九時に終了する。明日難しいあの仕様書を今一度やりなおすとのことで、そのため大多忙である。」とか「八日、金曜日、掃除を済まして、仕様書を終日書く。午後四時全部終了。人差し指と親指はとても痛い。」、更に「九日、土曜日、林さん来り一応技手に見せて一時より訂正の箇所は訂正して、請求書及竣工届を認め、午後二時一先ず完了する。渡してしまふ。それから新聞読んで過ごした。大分疲労を感じる。」とあり、月末まで「村内請負見積書書き」を「午前中に完成」とか「今月の決算に取掛り、午後九時半に養鶏日誌家計簿とも完全に終わる。」等と記している。

父親は今でいう司法書士のような仕事をしていたと家族が指摘しているが、日記中から探ると登記手続きや民事関係の記事が見受けられ、支庁や営林署等に提出する書類作りが目立つことから、恐らく大正9年(1920年)の内務省令第40号に規定された一般代書業に就いていたのではないかと思われるでもない。しかしながら、Aの父親が資格の有無も含めて何時頃から代書業に就いていたのか定かでないため明確なことは言いにくい。ただ今日でいう行政書士のような、官公署に提出する書類や申請、添付書類作りに忙殺されている記事が多いことは確かである。それは2月7日(水)に「夜丸丈さんが来宅、小笠原島郵便局官舎、浴室その他新築工事仕様書を見て戴く。」と共に「これからやる内訳明細書は検算に検算をして訂正の無いようにやってほしいとのこと」という記事等をみると肯ける。それ以降も概ね丸丈組のような依頼が続くからである。

丸丈組は「大正丸というのは丸丈組の持ち船で、夏場は鰹漁、冬場は珊瑚漁に使った。沖縄の人を沢山雇って獲った鰹は陸軍の主計が買い上げた。丸丈の帳場が浅沼龍之助宅にあって、彼は日本郵船の仕事もやっていた。兄は助役や在郷軍人会長もしていた。二階家の南陽館は兄がやっていて役所の指定旅館だった。野村吉三郎や伏見宮とか、中井猛之進やその学生達、それから堤林数衛(図4)などの色々な客が泊まった。山階宮は全館を借り切って一週間程滞在した。大村埠頭近くにある役人達に月極で三度の食事を提供したり、珊瑚の入礼会(図5)や村内書道愛好会(図6)、文藝春秋社の座談会など諸会合の開催場所に利用されたりした。」と島民が回想(浅沼、私信、1996)しているように、明治の

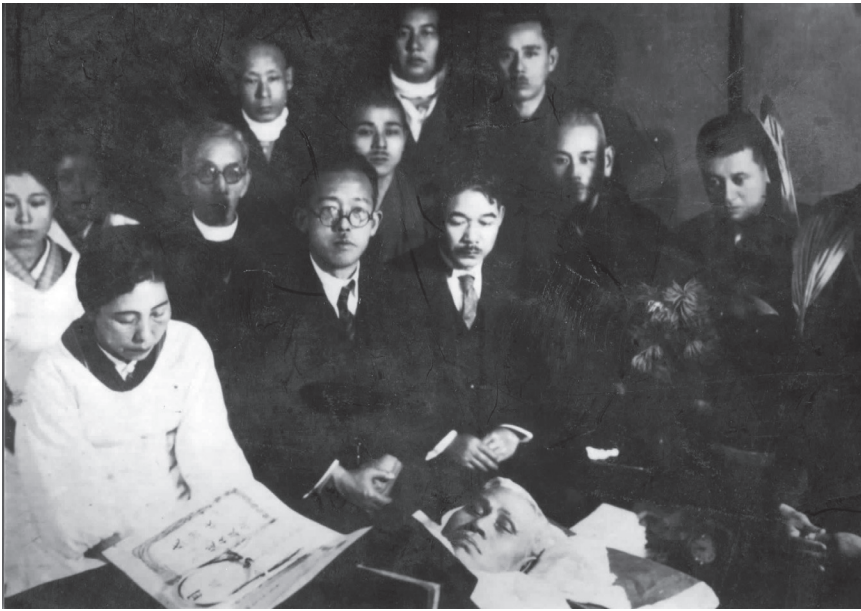


図 4 臨終の堤林数衛

向かって右より浅沼丈之助、渡辺三朝、猪子徹雄、堤林数衛、平野緑、宮内二郎、警察署長、加藤忍平、一人おいてジョセフ・ゴンザレス、浅沼初江、菊池スエカ（浅沼陽所蔵）。



図 5 大正末期の珊瑚入札会場

前列道を挟んで左が豊島恕清、右が高橋延寿（杉敦子所蔵）。



図 6 大村書道愛好会（年代不詳）

前列向かって左から 2 人目重田彌兵衛、白水陽、要塞司令官、平野縁、石井武山、右端小林鉄工所長（浅沼陽所蔵）。

開拓期に入植した八丈島三根村出身の浅沼丈之助が起こした回漕企業で、当時は嫡男の孫助（後に丈之助襲名）に代替わりして廻船運漕や旅館を経営していた。孫助は小笠原支庁命令航路（通信省、1933）として父島聳島弟島線を担当し（山方、1906）昭運丸（10 t）や以知丸（4 t）等の所有船で貨客を運んだり、定期船芝園丸の艀作業を行ったり、また父島要塞司令部関係の仕事も請け負ったりしていた。弟の龍之助は保証責任父島漁業協同組合長として沖縄糸満系の大城安則組と契約し鰹漁を行っていた。浅沼家は土地持ちの網元であり、大村総代（村会議員）を務めるなど島内の有力者で、色々な事業に関わり官公署に提出する書類も少なくなかったことから A 宅と強い関わりがあったと見てよいだろう。

他に丸大、丸若、丹組等の業者から舞い込む注文に即応して、達筆な A が清書し父親を経て依頼人に手際よく文書類を手渡していたから、頼んだ人も息子へ直に代金を持参して支払いを済ませている。その彼に父親は収益金から毎月 5 円を小遣いとして与えている。言わば書類作りが彼の唯一の収入源であったため是非とも奮闘する必要があった。5 月 3 日などは林へ依頼文書を手渡すと同時に彼から「カステラと寸志の 30 円」を得て、過分と辞退するも是非にと言われやむなく受け取り直ちに貯金をしている。報酬とは別なので父親の了解を取って彼の臨時収入となったのである。師走にも 50 円を得ている。日記に「労力に対する初めての報酬だ。」と記している。

小笠原島庁は既に明治 30 年（1897 年）に「土木工事村請負規程」を定めて、関係業者に見積書や請書、出来形精算書、職工人夫及諸色買入明細帳等を必ず揃えるようにと命じている（山方、1906）。したがって工事請負人は定められた書式の文書を速やかに作らねばならなかった。個々に作成し役所に持参してもよかったが、先述の林や浅沼は書類作りに時間が割けなかったせいか A の父親に依頼せざるを得なかったのだろう。ために A は父親を助けて病身であったにも関わらず体調の許す限り代書業を手伝っていたのである。

また林さんこと林亀吉は浅沼と同様に顧客の一人であり林カフェの経営者であった。彼は料理だけでなく芸妓も数人抱え、更に傍ら島桑の諸道具や地物の盆栽、土産品も売っていた。島内に山林や畑地を多く所有する資産家である。店については東京府（1929）の『小笠原島総覧』にも記載されているが、「二階のある西洋料理屋で、牛肉のステーキなんかもあり洋食が食べられた。ミルクケーキや牛乳は 10 銭でよく売れた。氷を入れて掻き回して作られたアイスクリームもあった。徴兵検査の打ち上げのときはここで宴会が盛大に行われた。6～70 人程が集まって一人 3 円くらいずつ出して飲み食いするので大変賑やかだった。」と 1993 年にヘンドリック・セーボレーが語っているように、官吏や軍人がよく利用した洋食店で大いに繁盛していた（瀬堀、私信、1993）。林は近所の関谷酒店や村松商店と同じように A の家に鶏卵を定期的に何百と注文する上客であり、また各種の文書作成では頻りに依頼しているので何等かの他の事業に手を染めていたのかも知れない。支庁に提出する文書である以上いい加減には書けなかったから、記述に定評のある A の仕事は重宝がられていたに相違ない。

小笠原は暴風雨の度に多くの建造物が破損したので再建工事も盛んに行われた。例えば昭和 2 年（1927）10 月 1 日の台風によって、父島海軍電信所が被災した際の復旧工事（海軍省、1927）は、「急施ヲ要スル」とした横須賀鎮守府の求めで内地から多くの大工や鳶職が動員された。このときは大台風で、全島損害額は約 37 万円（高城ほか、1957）に上っている。そのため軍の御用達だった丸丈組等も当然協力を求められたと推測する。他にも昭和 11 年（1936）5 月から約一ヶ月間行われた陸軍省軍務局防備課による父島要塞清瀬弾薬本庫並びに清瀬監守衛舎改築工事（陸軍省、1937）は総額 12710 円の予算が付いて早急に進められた。このときも同様に労力を提供したと考えられる。こうした工事は大小となく頻々と行われたから、恐らく A の父親以外にも代書業に従事していた人は複数いたのではないかと考えられないでもない。

ところで彼の罹病だが、自身が語るように高等科 1 年在学中に悪化し自宅療養に専念せざるを得なくなっただけではない。日記を書いている頃は 18 歳と述べているから休学してから 5 年程経過し病状は進行している。特に 2 月 8 日に「右背部が咳をする度に大きく痛むのは

苦しい」とか14日には「背胸部の不快はじりじりと冷たい汗の出る」程で、その一週間前は「右であったが一昨日あたりから左に」移ってきたとか、「命旦夕に迫る前兆?」と述べ、半年後の9月15日には更に「この頃いよいよ灯の尽きる頃が間近に迫って来た事を思ふ。胸が痛む。右の胸が激しく痛むのである。いま死ぬのはいやだ。もっと心の落ち着きを得てから死にたい。」と書留めている。彼は苦しい状態に置かれながらも既述のように家業を手伝い、「長男として両親を扶助し家族をしっかりまとめなくてはならぬ」と自戒したり、そのためにも学問を修め教養を積むことが肝要だからという思いで、早稲田大学出版部から中学講義録や文学全集を取り寄せて自学自習したりしている。そして、青年らしく「将来は書店を経営したい、養鶏学を学びたい、あるいは作歌を続けたい」といった希望を吐露している。

Aの家は写真帳で見ると幾つかの座敷、調度品等から推して島内でも裕福な階層に属しているとみてよいだろう。貸し金や債券、株券、預貯金、電話設備の他に珊瑚漁用の船も所有し袋澤や南崎に数町歩の地所もある。島民の生活に関しては前田定（高城ほか、1957）が「戦前の母島は農漁業合わせて年に160万円くらいの収益をあげていた」から「労働者の家で1万円近い預金をもつのは珍しいことではなかった」と語っているので、例えばA宅に5～6万円程の預貯金があったという家族の指摘は強ち誇張ではないかも知れない。父親は内地に居たときから既に物流関係の業者で大陸にも行っていたらしい。その後来島してから所帯を持ち、Aと二人の娘を得たのである。日記には5人の家族以外は余り登場しない。親類縁者はよく分からないが、扇村に数軒のAの姓の家があつて（小笠原対策本部、1971）母親が通い船を利用して扇村に墓参りをしている。明治9年（1876）の渡航者名簿に同姓の入植者が存在するが縁故関係は分からない。母方の縁辺で袋澤村出身の島民が南洋貿易株式会社ロタ島支店に勤務し、Aと手紙のやり取りをしている。

彼の日記には頻りに政治的な事件が書かれている。例えば1月に米内光政内閣が成立したとか2月には斉藤隆夫代議士の演説が問題化しているなど、3月には汪精衛が南京政府主席に就任、9月に日本軍の仏印進駐が始まるというように記している。また第2次近衛文磨内閣が7月に成立した後で日独伊三国軍事同盟条約の調印、10月に大政翼賛会の設立と綴っている。そして次第に総動員体制の下に国民生活の破綻徴候が見え始める頃になって、Aも漸く物資不足に気付き、養鶏飼料入手上の困難とか卵価の公定価格維持という課題に直面することになる。

2. 日記の中の出来事

1月記事 当月は先ず養鶏業者にとって看過できない鶏卵公定価格の件で生産者側と警

察とで行き違いが起きた。日記に、「二十九日、月曜日、曇天、寒し。午前七時起床する。昨日の不快はほぼ快方に向ひつつある。鶏卵の件は再度警察に出頭して署長の意見を聞いたとのこと。それによれば、警察に於ては昨日の協定は関知せず、つまり昨日のは闇値なる故、認めることはできない、今度のやかましくなったのも十銭以上の高値で売った人があったので警察の取締り方針のもとに公定値を通牒したのであって、昨日の値は総動員審議会に願書を出して認可を受けたらよいであらう、それ迄は警察では関係はない知らぬとの意見。つまり七銭八銭といふことを警察で定めたといつては、警察で闇値を認めた形となるので、他の物価取締りの上からの意見だらう。」とある。3 日前に小笠原警察署から A の家に「鶏卵の公定価格は百匁三十七銭で、個数売りは一個五銭を出でざる旨の通牒」が来た。それを深刻に受け止めた父親は同業の村松、木野、毎田に連絡してから大村商業会にも協力を求め、総勢 7 名で同月 28 日に警察へ掛け合いに出かける。そこで「当分の間は鶏卵一個最高八銭、最低七銭とする。」ということを確認させた。七銭というのは卸値のことかも知れない。取りあえず要請通りに進出したので一同大いに安心した。ところが急転して約定は反故になったのである。それでも A は「家では七銭乃至八銭で売却するつもりだ。」と書いている。実際はどうだったか言及がないので何とも言えないが、成鶏 200 羽程を飼養し産卵は多いときは日に 7～80 個、少ないときは 50 個で、概ねすぐに売り切れるとか大口の注文には 1 日 150 個は必要だから飼料の確保が重要だと言っているところを見ると、3 月下旬に警察から鶏卵価格を百匁 40 銭に値上げ可という連絡が来るまで渋々既述のような値段を強いられたのかも知れない。その後卸値も小売値にしてしまったとあるが具体的な数値の記述はない。彼の家だけが違反覚悟でもって要請時の値段で売り抜けることは先ずあり得ないから、たぶん 6 銭前後の単価を維持せざるを得なかっただろう。そして、その頃に陳情仲間から養鶏組合設立の話が出始める。

当時、闇値取引は全国的な現象であり、戦局が進むにつれ売り惜しみや買い占めが横行したのは事実である。因みに『事変下の犯罪状況』（内閣情報部、1939）によれば、「本年五月三十一日までに全国（内地及び樺太に限る）検事局の受理した違反事件は一万一千百五十四件、一万八千八百八十三人であって、その中、二千八百三十八件、四千二百九十二人が起訴された。」とある。起訴猶予もしくは不起訴処分、あるいは取調中の事案を含めるならば実勢はもっとあったと考えるべきだろう。

隣の八丈島では「木炭の品不足に伴ふ、仲買商問屋側の争奪戦は、冬期を間近に控へて、更に深刻化しつつあるが、この為生産者と仲買業者との間に公定価格を無視した闇取引が相当行はれ始めた形跡がある。」といった記事（南海タイムス、1939）が現れ、目下八丈警察署の経済保安係が各駐在所と連携し内偵中であると報じている。そして年末に八丈支庁、

警察、組合の三者協議の結果、木炭小売りの適正価格表を決定公表し経済違反には厳罰をもって臨むとある。タイムスの小笠原支局（東町の読売新聞専売所）や島内の八丈系島民の多さから思料すると、小笠原にもこの情報はいち早く伝わったに相違ない。日記に「三月二十四日、木野、毎田、父が組合設立の広告を出した。」とあるのは各商店が協調して対応した方が有利だと気付いたのだろう。もっとも八丈島では「時局認識による職域の奉公」が重要であるからとの理由で、地元警察が主導して商業組合の設立を促している。恐らく島内 64 商店中 20 数軒もの違反商人が現出したことから、集中取締の必要上当局が組合結成を声掛けしたのかも知れない。

父島でも「六月十六日、今夜養鶏組合の設立総会」とか「八月十九日、養鶏組合の事務を処理してしまふ。」とか「十二月二十日、今日は養鶏組合の事務を処理する。殆ど一日かかる。」という記事から、大村養鶏組合は結成され支庁や警察との連絡や庶務は A の家が担当したのではないかと思われる。

国家総動員法の改正後、時の政府は統制違反撲滅を喧伝し、例えば内務省に経済警察の強化を促し、農林省へ「食料品の闇を無くしませう」と告示させるなど（内務省、1938）して、一般国民に更なる国策協力を強いている。昭和 14 年（1939）の所謂 9・18 停止令に基づき価格が据え置かれ、小笠原も例外なく日中戦争（支那事変）以後の消耗戦の銃後として次第に統制が強まった。卵を 1 個 5 銭で売ったら赤字で損になるというのであれば誰もが売り惜しみ、闇取引が横行して結局市場に物が出回らなくなるのは当然で、飼料も同様である。いやそればかりか国民生活全般にわたり様々な統制が行われた（内務省、1939）から混乱が起きない方がおかしい。そして、第 2 次近衛内閣が昭和 15 年（1940）7 月に成立すると、戦時経済体制がますます強化され贅沢品禁止令や小麦粉・米穀・砂糖配給統制規則が公布され、飲食店の米使用禁止、ダンスホール閉鎖、国民服制定、隣組設置などが実施されていく。小笠原も正月用品の準備を始める歳末辺りから目に見えて店頭から物が消え、統制のしわ寄せが来る。

しかしながら、「今日林さんから羊羹と生菓子頂く、奈良漬、最中も」、あるいは「近所より彼岸の御馳走で満腹」し、別ルートで「七月十日、飼料用の豆粕、配合飼料、脱脂糠沢山来て居る由」等の記事があったり、先の重砲兵の吉岡士官が父島に上陸した昭和 17 年（1942）4 月の時点で、埠頭前の店先には未だ「ピーナッツバターの缶が並んで売られて」いて、「内地では最早見当たらない光景だったから早速その品物を購入した。」といった記述を勘案すると、怒濤のように物資不足の波が押し寄せたわけでもなさそうである。

ただ A はラジオを聞いて三国軍事同盟や大政翼賛会の成立を知り、世の中がただならぬ様相を帯びてきていることに気付き始めている。「自由取引が駄目」とか「切符制」という

語句が日記帳に度々出てくるようになり、飼料の入手不安の中では養鶏業も立ちゆかないとこぼしている。この時期は養鶏業者に限らず恐らく他の業者や商店主等は、A のようにいち早く先行不安感を持ち始めていたのではないか。日記には書かれてないが、闇値の取締に関して科料、拘留などの処分種別の事案が起きていたに相違ない。統制違反に対する警察の取り調べ、1 個 10 銭で卵を売った店があったと父島の警察は言っているけれども、そういった類の事例はあったが療養中の彼の許には情報が届かなかったのかも知れない。

養鶏事業は支庁が大正期から何度かロードアイランドレッド、黒色ミノルカ、白色レグホーン、名古屋コーチン等を移入して振興を図っているから、そういった種類の鶏を取り入れ、狭小地でも効率的な battery 式の育雛法を採用していたと言えるかも知れない。彼の家でも恐らくこの方法で飼養し、配合飼料は内地の木村徳兵衛商店飼料部（現木徳神糧株式会社）や日配横浜工場（現日本配合飼料株式会社）、あるいは小山稲五郎商店に注文していた。

しかし、既述のように飼料の入手には色々と困難が伴ったのである。「1 月 23 日芝園丸入港するも養鶏飼料不積」とか、「26 日打電したのに木徳返電なし、飼料益々不足」、そして「連絡が来ないのは経済警察にひっかかったか」、「送金した金を社員が横領したかも」と不安を述べている。その上、復路の定期船芝園丸が風浪で母島東港に避難したため予定通り東京へ就航できない事態が生ずるに及んで A の焦慮は頂点に達している。返電が 2 月 1 日夕方に到着し「ミタエサオクレルミコミ」とあり、更に「四月二十七日木村商店エサツトメタレドモツメヌ」の電信が来ていた。

「品不足にもかかわらず両親が三日月山に度々青草取りに出かけて購入飼料に混ぜて飼養していたせいか産卵数は日に 50 ～ 80 個の如く従前と変わらず、卵と成鶏数十羽も直ちに売り切れる。」と書いている。また「五月十七日一部の卵を九銭で売る。」という記事も散見される。養鶏記事は通年にわたって見られるから、鶏の世話は代書手伝いに次いで A に任された仕事であったに相違ない。

2 月記事 彼は「此の月は希望通りの生活ができ」、「講義録の勉強の目標も立てて読書も進んだ」と述べている。更に「一歩たりとも友人に退けをとらじとする奮発心」をもって「思ふ存分修養に心掛けるのだ」と結んでいる。ただその背後には本来ならば内地の中学に進む志望をもっていたにもかかわらず病気で諦めざるを得なかったこと、また仕事に出かける友人の姿に羨望と焦りを感じつつ、それに比べて自身はただ無為に時日を送っているといった複雑な心情が隠されている。懸命に読書するのは、そういった気持ちの裏返しかも知れない。例えば「二十二日、木曜日、曇のち晴、朝の中、どんよりと曇って風も大変強かったが、次第に晴れてきて風ぎる。なんか文芸ものの雑誌がよみたくてし

かたないが、石津書店にはなく、婦人公論もなく、しかたなしに富士増刊よむ。近頃小遣が大へんいって閉口である。今月になってもう五円余使用した。これは私の身の廻り一般であって図書代は約三円五十銭を越える。今月は無駄遣ひが大へん多い、一考を要する。総合雑誌一円と文芸物七十銭、山本有三二円の三つとすると約四円である。月に十五円、いや自分の小遣だけの収入があれば気兼ねなく読書できるんだが。」とあるが、彼は家族が外出しているときは概ね代書の仕事、それが済むと読書したり掃除したり、時々鶏舎の見回り、鶏糞の袋詰め、卵数え、来客の応対をこなし、不調のときはずっと横臥している。入港当日はリヤカー（図7）で運ばれて来る雑誌、新聞、知り合いからの手紙、小包を心待ちにして玄関で待機している。往来から近所の友人が彼に声をかけ、そこで二三言葉を交わして「雄弁、日本評論共に二月号」を借りるとか、書店から永田秀次郎の『日本の前進』や島木健作の『嵐のなか』等の注文書が届けられると数日で読破するなど、その読書量は相当なものである。その他に早稲田講義録一式と月刊の雑誌があるから実際小遣だけでは賄いきれない場合があった。そういったことを自戒し、出来るだけ「茅根さんに現代四月号拝借、約三年といふ間種々な本をお借りし、得た知識は膨大」とか「関谷さんに借りた上田廣の『黄塵』を今日返す。」などの貸し借りで出費を抑えようとしている。

読書知識の集積は作歌や作詞という形で発散され、興亜行進曲の歌詞コンクールに応募したり短歌を作って新聞社に投稿したりしている。読書は「一人前の人間になるために、いや人並み以上の人間の心とならなくてはならぬ。」から是非必要だと自身に言い聞かせ、



図7 コンクリート製の丸形天水槽

(Office of the Chief of Naval Operations Navy Department (1944) より)

ラジオ放送の朗読までも熱心に聞き入っている。「二日、本庄陸男作『石狩川』、北海道開拓の小説だ。夜聞く。」とか「夜七時三十分から金子堅太郎伯爵の講演を謹聴」したと述べ、自己の修養に役立っていると綴っている。

3月記事 中旬に岡田撫琴来島の記事がある。北原白秋やサトウハチロー、佐藤惣之助、磯ヶ谷紫江、中島敦、小林秀雄、宮崎丈二、瀬川清子、あるいは倉田白羊や丸山晚霞など小笠原にも幾人かの文人が遊んでいるが、Aは、「三月十六日、土曜日、曇夕刻より細雨、暖。起床七時、眠いのには閉口する。父母、朝青草とりに行き、一人で留守番。日本評論読む。夜、おばちゃん来たり家内中で十時迄談笑する。岡田撫琴（日本派俳人）、伊藤左千夫、正岡子規、高浜虚子などと交友ありしといふ人、大屋さんの紹介で来島中。その俳画一個拾円で販売会今日ある。芸術的なものであるが、果たしてこれが本当の眼を以てこの絵の良さが分かる人が居るだらうか。」と書いている。「画仙紙にぶっつけに書いた如き絵、そして味のない俳句、果たして拾円の価値ありや。岡田撫琴果たして日本派俳人として偉大なる存在を示せるや否や。」と批評しているので、実際に出かけて見に行っただろうか。

岡田には「年魚いまだ膳に上らずほととぎす」という句碑が愛知県岡崎市に残っているように当地の俳壇で活躍した人物であり、本名は太良次郎と言ひ、明治6年（1873）生まれで来島した年に物故するから最晩年に父島に来遊したことになる。『撫琴遺稿』一冊がある。因みに撫琴を招いた大屋さんとは大屋政太郎のことで父島で肥料会社を経営し、大村尋常高等小学校に二宮金次郎の石像（現小笠原中学校に現存）を贈った人である。

4月記事 彼は東京朝日新聞が公募した興亜行進曲の歌詞を月初めに練り、月末の締め切り日に間に合わせるため推敲作品を中旬に清書して投函している。当選すると2000円の賞金が出るのだが自身の言うとおりの夢物語であつたらしい。当月は家族の既述が比較的に多い。1日の記述から、「月曜日、雨、寒。しとしとと終日雨が降りめっきりと冷たい。寝転んで読書だ。またこんな日にこそ食べ過ぎをするものだ。妹は上が高等1年、下は尋常5年にそれぞれ進級。私も早中講の一年生として妹達と一緒により真剣に勉学である。暇なときは妹達の学課の面倒をみること勿論である。今日は興亜奉公日といふのにそんなことは忘れてしまったやうな一日だった。それでいいのか、それでいいのかと心の奥で叫ぶ。母は二十六日に潮干狩に行った時よりなんとなく身体の調子が悪いらしく心配である。」とあり、妹たちは新学期にそれぞれ進級した。当時は義務制の尋常小学校と授業料が必要な高等小学校があって、小笠原では大村尋常高等小学校のように両校が併設されていた。前者は6年で修了し、後者は2年課程であつたが特に義務制でないため進学しない者もいた。Aは中学に進学しなかったのだが、罹患して達成できなかったので講義録で学習を始めたのである。彼は英語が得意であつたそうだから一時ジョセフ・ゴンザレスの英語英会話塾

に通っていたのかも知れない。妹たちは学力を相応に身に付けていたらしく、高等科の妹は任命制の副級長に選ばれている。また卒業後には神田の公立高等女学校に進学している。尋常科の妹も期末評定が全甲で、幾つか表彰もされている。

また、早中講とは先の早稲田中学講義録のことで、彼は既に前月の8日に前期1箇年分の会費10円50銭也を早稲田大学出版部へ支払っている。講義録は通信教育の先駆けで、事情で進学できなかった多くの若者に活用された。神田駿河台の大日本国民中学会講義録と双璧をなし、早稲田の場合は昭和33年(1958)まで続いた。

5月記事 当月は選挙関連の記事が目立つ。小笠原諸島は伊豆諸島と共に一選挙区に組み込まれて6月10日投票という日程で、初めて東京府議会議員選挙戦が当月末から行われ、少なからぬ島民が慌ただしい毎日をおくることとなる。「五月十一日、土曜日、今夜府議会議員総選挙（当地にとっては初の）に関する講演ある由にて、父は聴きに行つてゐる。」とか「今夜学校で菊池民一氏の応援演説。父聴きに行く。」とあるように、Aの父親は府会選挙に強い関心を持っている。それは明治大正期に行われた制限選挙下に、直接国税を納めて選挙権を保持していた関係もあるに相違ない。後述するが、町村制が布かれたときに行われた第1回の大村村議会議員選挙に立候補し当選していることから、地方政治に並々ならぬ関心を払っていたのだろう。Aは31日（金曜日）に、「晴天、暖。月末なので座敷を綺麗に掃除したし、家計簿、養鶏日誌の決算も終了して、今やと寝るところであるけれども、この二三日といふものほとんど勉強しない。身体がほんとに不調なのだ。今月末から来月初旬にかけて東京府議会議員選挙戦が展開。六月十日に選挙がある。初めての選挙、即ち公民としての選挙、そして又、大島、八丈、小笠原各支庁管内を一選挙区として当選者は一名を出す。小笠原よりの立候補は母島の猪子徹雄氏。その他八丈、大島からも立候補があるので、四五名に依る争覇戦であらうと思ふ。」と書き、選挙結果を注視したいと述べている。

確かに当島は今まで府会選挙は行われていなかった。そもそも小笠原は伊豆諸島と並び明治の開拓初期から地方行政制度の中では特別の扱いを受けてきた。明治22年(1889)1月の勅令第1号で「町村制ヲ施行セサル島嶼」のうち、東京府管下においては「小笠原島、伊豆七島」が除外区域と明記され、例えば郡区町村編制法等の地方三新法はこれを適用しないと位置付けられたのである。殊に小笠原は島嶼町村制すらも布かれていなかった。ここではそういった特例行政の実態については触れないが、遠島であるという理由で旧態の制度のままで推移し、昭和15年(1940)4月1日にいきなり普通町村制が施行され、それまでの世話掛は村長となり助役収入役が置かれて村民総代は村議員となった。その村会選挙直前に府会選挙が実施された(東京百年史編集委員会、1972a; 1972b; 1972c)のであ

る。小笠原では沖村農会長、同世話掛で、渡辺財閥系の企業に勤めていた（小川、2002；小川、私信、2003）こともある猪子徹雄が立候補し 6 月 1 日大村に遊説に来た。

また、この頃になると国内では盛んに「欲しがりません、勝つまでは。」とか「贅沢は敵だ。」というスローガンが宣伝され、食堂や料理屋の米食使用禁止、ならびに販売時間の制限、また砂糖・マッチの配給統制が始まり、次いで米穀配給通帳制や鮮魚介等生活必需物資統制も行われ始めた。父島でも徐々に影響を受け、更に「一日は興亜奉公日」とか「母は朝から午後四時迄司令部の除草作業の勤労奉仕に行った。」とあり、東町の隣保常会で打ち合わせが行われた。母親は大日本国防婦人会の父島支部役員を務め、竹槍訓練や千人針、貴金属供出、慰問袋、戦勝祈願、御真影奉拝の諸行事を率先垂範し、一汁一菜や日の丸弁当等耐乏生活に積極的に協力したので何度か表彰されている。

「常会は区割りがあって、私は A さんちと同じ 7 区に入っていた。竹槍訓練では身重だったが槍を握ってエイエイヤとやらされた。大村は司令部があるから特にみんな参加した。」と証言する島民がいるように不参加は考えられなかった（吉田、私信、2010）。常会は人々の動静を探る相互監視の機能もあったのかも知れない。監視といえば父島憲兵隊は警察と連携し欧米系島民をはじめ来島外国人や在島華僑、朝鮮人を尾行監視した（長谷川、1932）。日本郵船の手伝いをしていた島民が「帰化人さんは日曜日になると礼拝のために固まって大村の町を歩いて教会に行ったが、ゴンザレス司祭の後任の岩井司祭が着任して礼拝を始めると憲兵が来ていろいろ文句を言うようになった（浅沼、私信、1998）。その人たちの誰かが船の切符を買おうとすると、何で内地に行くのか、そんな用件なら島で済むだろうとか言って干渉した。」と語っているが、憲兵は内地の外国人と島民との接触に殊に神経を尖らせた。下船した外国人には憲兵が必ず同伴し、例えば「英国人は南陽館に投宿後、西町居住の帰化人宅に二時間滞在、翌日午前九時に母島へ」と逐次要塞司令部に連絡している（市村、1931）。A も新約聖書の語句を引用したり神に祈ったりしている記述があるから、知られた場合は信徒ではないにしても「要視察人」として扱われたかも知れない。なお岩井司祭とは岩井祐彦（後に立教大学経済学部教授）のことで、昭和 18 年（1943 年）12 月 22 日に日本聖公会から父島に派遣された伝道師である。翌年の 6 月 30 日信徒の 9 家族と共に島民の強制疎開命令により上京した（鵜川、1993）。

また、興亜奉公日とは昭和 14 年（1939）9 月から昭和 17 年（1942）1 月まで、毎月 1 日に実施された特設日のことで、戦場の労苦を偲び一億一心興亜の大業を翼賛しようという趣旨の下に勤労奉仕や神社参拝等が行われた。後に大詔奉戴日へ発展吸収された。大村でも行われたと思われるが、八丈島では傷痍軍人会が慰問袋と慰問文を作り前線の将兵に送っている。

6月記事 府会議員の選挙結果が既に11日の日記にある。「火曜日、終日雨、涼。府会議員、当選挙区の当選者、菊池民一、八丈立候補」と書かれている。菊池は「東京市から東京都に変わる時代に、牛込区会議員となり、終始伊豆諸島の問題を、東京市（都）の議政壇上で語り続けた」人物で、「伊豆諸島を東京都の区域からはずす案に対しての反対運動のなかで」大いに活動し島民から感謝された（伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会、1981）という経歴の持ち主である。民政党から立候補して2481票を獲得し他の3人を引き離して当選した。無所属の猪子は611票、最下位で落選した。

その府議選の熱気もさめやらない中旬から早くも大村の村会議員選挙戦が始まる。14日（金曜日）に芝園丸で到着した徴兵官の一行が会場を検分している最中に選挙運動が行われ買収まがいの事案も起きたらしい。例えば、「二十一日、金曜日、曇後雨、涼。今日知人宛に府議選のニュースを手紙に書いて半日かかり、勉強は中止。五月二十二日に入荷した配合飼料を我々の団体でうまく取ってしまったといふ噂を友達から聞いた。村会を旬日に控へて利用している由聞いて憤激に堪へず。それならばそれで又、我々も大いに考えるところがある。事情も知らず村会に利用するなど以ての外のことだ。そして又なんたる悪らつなことだ。」とある。数日前にAの父親が養鶏組合の設立総会に出ているから、文中の「我々の団体」とは設立準備をしていた大村の養鶏業者たちのことを指しているのかも知れない。どうも入手飼料を村会選挙用の鼻薬にしたらしい。当時、たいていの家で大なり小なり庭に小屋がけして鶏を飼っていたから、餌の差し入れは相当に効き目があったことだろう。

そういった動きを耳にしたAは「道徳も常識もない村会の運動」とか「ボスが出たらこの村の発展は望めない」と述べると共に「村の選良は教養ある現代人で、村の課題をしつかり捉えて私心無く、確固とした思想信条のある人物であって欲しい。」と青年らしい純粋な気持ちで村議選の行方を見守っている。そしてその資格が自分の父親にあるかどうかについて、29日（土曜日）の日記に「晴、スコール、暑。村会議員の運動白熱化してゐる。しかし、私は父が傍外にあつて静観的態度をとつてゐるのを嬉しく思ふ。父の選出の可能性は充分にあると信じてゐるけれども、落選の気分を思ふと。父の政治的腕前はたしかにあると信じてゐる。もっとも性格に望むところは幾らもあるけれど。」と言及し、立候補した父親にある程度期待感をもった言い方で結果を待ちたいと結んでいる。

ただ村議選酣の中であつたけれども、Aは数日頭痛が激しく全身に鉛の塊を吊るしているような気分で過ごしていた。「人間苦界のあらゆる苦をなめに生まれた」自分は勉強も仕事もできず、一日ぶらぶらと過ごして死にいたるのだと悲観し自棄になっている。代書の仕事も講義録の学習もできず、たまに鶏舎を見回ったり、ヤップ島やロタ島の知人に手紙

を認めたりする程度で殆ど病臥する毎が続いていた。

7月記事 1日は興亜奉公日であるが、大村村会議員選挙日でもあり、日記には「月曜日、晴、暑。夕方ザーッとスコールがあったときは気持ちがよかった。村会議員選挙当日である。父は意外に点数は多いらしく、今八時半でまだ分からないけれども当選することは自他ともに許してゐるやう。今の衆の反対がない様祈る。父の選挙民は質が大へん良いし、又運動もせず、友人が勧イウといふ程度である。」と書かれてある。次に「父は二十五票で第七位で当選」とあり、それ以下の選挙結果がメモされていて、「三朝 四十三、丸丈 四十一、浅啓 三十七、坂本 三十四、小祝 三十二、山下 二十六、父 二十五、宮内 二十五、高橋 二十一、大野 二十一、河野 十九、増一 十九、次点は小松 十五」となっている。トップ当選の三朝とは新潟県人の渡辺三朝のことで、明治17年(1884)年生まれ、八丈島を経て明治37年(1904)に来島し、西町で理容業と化粧品店、米穀、呉服商等を経営する傍ら父島美容術組合長に就任、一方また大村の消防組頭、あるいは村民総代(南海タイムス、1935)としても活躍した(渡辺、私信、2013)。森泉平助(日本銀行代理店)や堤徳蔵(硫黄島産業会社)と協力して、堤林数衛(図4)を招聘し小笠原電灯会社を立ち上げ大村沖村一帯に送電したり、大神山神社の神官を務めたりするなど公共の活動に奉仕した人物である。なお堤林は明治6年(1873)生まれの山形県人で、インドネシアを拠点に南洋貿易に従事し、晩年小笠原に渡って火力発電事業を起こした。昭和13年(1938)66歳のときに父島大村東町で死去した(浅沼陽、私信、1996)。

次いで3日にAは「航空隊の官舎街で映画があり、近所の小母さんがトラックで行く」というので便乗したという記事がある。映画自体には何の感想も述べていないが、「あの辺鄙な奥村がよその町に行ったような感じで、兵舎の灯火の窓越しに見える」光景に驚いている。明治10年(1887)3月の奥村の居住民はセーボレー一族とジョージ・ワシントンのみ(外務省、1887)であったが、その後は池田實の作成した奥村復元図(図8)のようになっていた(池田、2012)。「昭和十二年以来初の外出で、満天の星空の下、トラックの前灯で明るい。夜道を疾走して何とも言えない快感」の中で、「大助のそばのトンネルははじめて見る、なかなか立派」で、変容した奥村の姿を印象深く記している。

当月は他に5日の船で来島した国防婦人会役員今泉周逸大佐や東京府総務部長の歓迎会に両親が出向いたり、灯火管制訓練に参加したり、南洋航路の復路の船が入って訪客が多かったりと色々忙しい。「十日には村長選挙の村会で村長は重田先生となった。」とか「十六日航空隊官舎で映画。また行く。」「十七日母島から来た書類を整理」し、「二十八日貞頼神社祭礼、母と妹行く。」等の記事があり、部屋の電灯修理で作業員が来る、井戸水が濁るので閉口したと続く。重田彌兵衛は長野県人、大正年間に大村尋常高等小学校に赴任、同

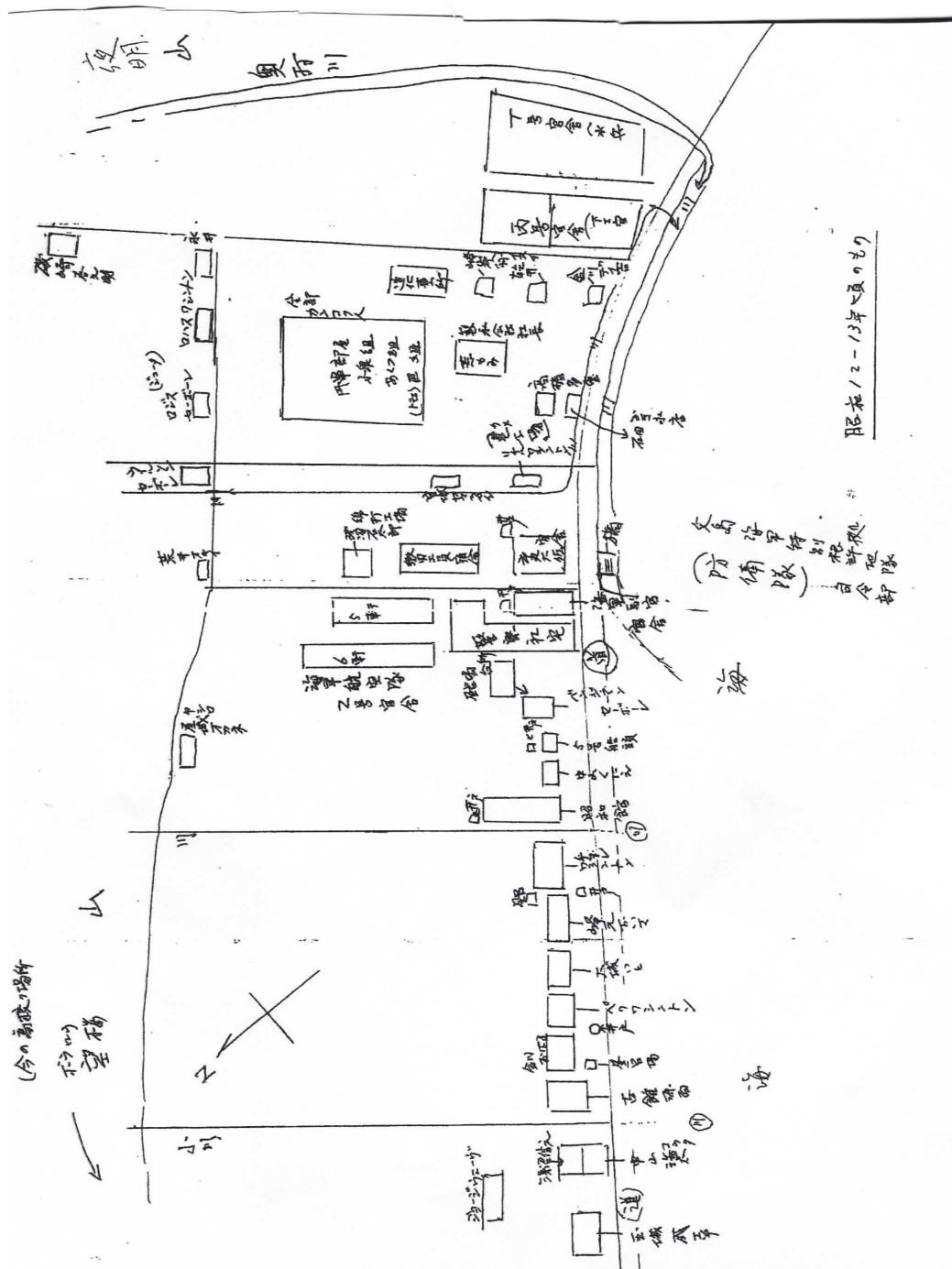


図8 昭和12～3年頃の奥村の復元図 (池田實所蔵)

校校長を経て大村村長に就いた。また中下旬の日記には政治向きの記述が多くなり、「毎日十一時頃迄ニュースを聴くので朝寝坊ばかりして、毎朝硝子戸を開ける父の苦い顔を見る。」という記述もある。

8月記事 当月の主な記事は幸神丸と鰹漁、検閲がある。幸神丸については、「五日出帆の筈」とか「幸神丸午前八時硫黄島へ向け出帆する」と記されているが、既に「一月六日午後五時幸神丸野菜積込東京行」、「四月九日午前十時野菜移出のための臨時船入港」、あるいは「十二月二十七日幸神丸夕刻硫黄島より入港する。」の記事から推して日本郵船の定期船芝園丸（貨客船、1831 t）や近江丸、天城丸と併行し、こういった小回りのきく貨物船（50 t）も物流の一翼を担っていたことが分かる。幸神丸は父島大村船籍の公称馬力 63、番号 31688 の sloop、東町の宮内二郎の所有する機帆船（逓信省管船局、1940）で、主として収穫期の 11 月から 5 月にかけて小笠原特産の蔬菜類を搬送していた。その他に臨時に千歳丸や田子浦丸が島と内地を往復した。三毛作、四毛作で生産されたキュウリやトマト、冬瓜、メロン、西瓜、南瓜等促成野菜の一船の積込みは平均 1500 t、海岸のタマナの木の下で、村中総出で荷造りし二昼夜はかかった（高城、菊池、饒平名、1957）という。

また、夏場の鰹漁について「七日鰹が大漁で工場でも始末に困る由で、安値なので家で節にし母多忙」という記事があるように、小笠原では 7～9 月にかけて竿釣りの近海鰹漁が盛んに行われた。丸丈組親方の浅沼龍之助は地元漁師に加えて沖縄県の上原組や大城組と組んで毎回 7、8 人の人員を大正丸やカヌーに乗せ出漁した。箱眼鏡などで漁場を決めてから袋網や袖網を設け、追い込み漁師がカヌーや潜りでテンテンという脅し漁具を使って魚群を誘い込んだ。これを 1 日に 4、5 回行い、水揚げの殆どは冷凍して内地へ運んだ（中楯、1989）。

島内には母島北村の河野水産や沖村の前田商店、父島大村の石田商店の工場が鰹節を製造販売した。戦局が悪化する 18 年以降になると軍の主計が代わって魚介類やその缶詰の大部分を買い上げた。当時を回想して北村の島民が、「うちは『ひし力』っていう山にカの子が付いている箱に鰹節を入れて東京のニンベンに出した。そこの人に小笠原物は土佐や焼津、南洋、金華山と比べると節の皮がちがう。いい鰹は割れやすく、逆に南洋のは油がない。小笠原のはちょうどいい。でも、数が少ないって言われた。」と語っている（板東、私信、1995）。「焼津から鰹節の先生が来て島の人に製造の仕方を教えていた。鰹節を削る大会があった。賞も出た。」とか「うちは鰹の塩辛を一年分作ったり節にしたりして貯蔵した。」、あるいは「ホシ（心臓）を焼いておかずにしたり、新鮮だから生食したりした。」という思い出を語る島民もいる。

鰹の竿釣り生産額は、昭和 16 年（1941 年）では 175,972 円、経費が 131,589 円、差引利

益が 44,383 円となっている（辻、1985）。鰹漁と併行して鯨漁も盛んで竹輪の材料として、また鯨節として内地や大陸まで出荷された。大正末期から昭和 10 年代にかけて小笠原では鮪、沖鯨、珊瑚並びに捕鯨業が盛んで、鮪の漁獲は A が大村に移転した頃から鰹を追い越すほど急成長する。また、A の父親は所有する珊瑚船を使って船頭を雇い西町海岸から度々出漁させている。

最後に写真撮影に関してだが、大村一帯が要塞地帯であったから立ち入り自体厳しい制限があり、父島憲兵分駐所に予め申請し許可を得てからでないと撮影が認められなかった。開拓初期の風景を撮影した従軍写真師松崎晋二や小川、光村写真部が活躍した頃と異なり、要塞地帯法が公布され父島に陸軍要塞司令部が設置されてからは自由に写真撮影が出来なくなった。日記では「十四日、検閲に持っていったのであるけれども掛員留守で明日とのこと」とか「十五日、写真機の撮影許可願を父の名によって提出。未成年者には不許可の方針故父の名にした」、また「二十四日、司令部より許可証交付さる。」という記事がある。明治 32 年（1899 年）年 7 月 14 日の法律第 105 号要塞地帯法第 7 条に、要塞司令官の許可が無ければ「測量、撮影、模写、録取スルコトヲ得ス」とあり、その違反例として小笠原営林署長が出版物の写真掲載にあたって許可を待たずに刊行し、司令部から訴えられ裁判になったことが伝えられている（浅沼陽、私信、1998）。土産品の絵葉書にも要塞司令部検閲済みと印刷された商品のみ販売を許された。

9 月記事 当月は死者も出た台風の来襲と南洋航路の記事が目立つ。小笠原は沖縄と似て台風の通路になっている。その経路は多様で類型化は難しいが、一般に北緯 15 度付近のマリアナ諸島近海に発生した台風は西寄りに進み、次第に北寄りに進路を変えて北緯 25 度辺り、沖縄の東方で転進して北東に向かって加速しながら日本本土を歩いていくパターンが考えられやすい。だが、本土に影響の無い小笠原海域止まりの台風も少なくない上に時季的に遅く発生接近するものもある。何れの場合でも共通するのは暴風や高潮高波による建造物や樹木の倒壊、土砂崩れや地滑り、あるいは塩害だろう。船便の運休も島民の生活に大いに影響する。彼の日記に「一日夕方になり暗雲低迷、台風の前兆？芝園丸は夜になるも母島より帰島せず」、「二日近海に低気圧あるらしく終日強い南東の風吹く。午後四時出帆の芝園丸もその為出港無期延期となる。夕方益々風強くなりこれが最高であらう。」とあり、スコールがあるが一時風雨が途絶えたので、その間に防空訓練があり家族は消火や防毒訓練に参加した。A も居職して仕様書の下書きをしている。ところが、「六日九時頃に雨交じりの強い風が吹いてきて、隣家で防風用意の金槌の音がし出した。益々ひどくなり、家でも十一時半、殆ど絶頂の強風といふ時、暴風の準備は終わった。水産会社のトタン屋根がはがされ飛び交ふ最中に、その作業を父がやったが側で見てゐて気が気ではなかった。

夕方ちょっと風いだったので父は屋外に出て様子を見に行った。」とあり、湾内に係留していた船は大部分水船となって使えず、司令部のモーター船は沈没、幸神丸は岸に乗り上げたことが判明した。通信隊の無線塔は倒れ、倒壊した家屋は表通りに多いという話を聞いた。その後また強風が戻ってきて、夜になっても電灯が点かず一同暗い中で夕食を取る。猛烈な風がひっきりなしに吹きまくっていたが漸く「七日今朝は嵐の後の静けさであったが、第二の台風来襲で終日心配してゐる。夕方の予報によると昨日のより弱いだろうと書いてゐる。被害を見てきた父によると、奥村は殆ど全滅のやうで知り合いの家は半壊、官舎などびしょぬれ」の由で、一番やられたのは奥村と西町海岸だと聞く。翌日ようやく風は収まったが未だ断続的に雨が続き、大村の大野造船所は全滅で幸神丸の損害も甚だしいという連絡が来た。電話で得た情報では扇浦は被害が少ないが、母島は甚大で死者が2名、被害家屋は257戸、他にもいろいろと被害があったらしいということであった。沖縄のような石垣や島特産のタマナ、桑等の天然木や生木を多く使用した軒の低い家屋ならばある程度の暴風雨を防げたかも知れないが、屋根は概ね棕櫚を葺いたものが多く、樋水を受けやすいトタンもしくはスレート屋根や板張り家屋の場合は破損は免れない。

この台風の影響で南洋航路往路便である天城丸（貨客船、3165 t）が来ない。この復路の船でAは南洋の知人、大正年間に扇村袋澤村からヤップ島に移住した人々の中の一人に羊羹30本を注文し、帰りに受け取る積もりであるらしい。「9日入港予定が、結局3日遅れで12日午前7時に大村二見港に入り、そこで早稲田大学出版部よりの先日の試験回答受け取る。75点。新聞や飼料も受け取った。」その後の天城丸出港記事はない。実は15日に3つ目の台風が接近して風雨が強まったが、これは小笠原をそれて事なきを得た。その後24日午前10時に更にもう一つの南洋航路船の近江丸（定期貨客船、3393 t）が入港し、新聞雑誌、郵便物等の内地物資が届く。

当時、信託統治領の島々と内地間を結んだ航路が南洋航路であり、この時期には西回線と東回線、それに神戸、父島二見港を経由してテニアン、ロタ島を航海するサイパン線があった。二見港に寄港した近江天城の両船（日本郵船戦時船史編纂委員会、1971）の他に生駒、弁加拉、泰安、笠置丸の各船が就航、年18航海、一航海30日の所要日数で往復した。海の生命線であるこれらの南洋群島への航路は日本郵船株式会社が担当した。「赤い夕陽が波間に沈む」と歌われた政府命令航路であったが、続く戦争で大部分の船舶は空爆もしくは魚雷攻撃で沈没した（戦没船を記録する会、1995）。

話は戻るが月末にヤップ島の知り合いから「パインアプル五ハコタクソウ アマギマル ニツンダ ジムヒツヨウ ウケトリコウ」の飛電があり、彼は10月7日午後に入港した天城丸でそれらを受け取った。更に前日の芝園丸便でも郷里の長生郡から梨4箱、八丈島か

ら芋類を受領しているので物資不足と言いつつも比較的に内福である。「既に村では彼岸の入りの頃の商店に品物がなく、試しに自家製のお萩を出した店に客が殺到し黒山の人だかり」という記事があるが、小麦粉も入手困難、したがってパンも買えず、衣料用に白緋 1 反を買ったら 8 円近くも取られて驚いている。ただ近々買えなくなると思い仕方なく購入した。

10 月記事 今月は深夜の防空訓練と灯火管制から始まる。「二日、水曜日、今日の午前零時より防空訓練開始される。不気味な半鐘の音が数回聞こえた」が、「果たして実戦時」に役立つのかと疑問を呈している。全村民が静かに平静にして訓練に参加しているが本当はこんなものではないだろうと鋭く見通している。彼の指摘したとおり、昭和 19 年（1944 年）の父島空襲では村民は逃げ惑い東西両町の大部分は灰燼に帰した。

彼は前夜未だ電気が通っている内に読書や妹の代数の宿題に取り組み、また帝国生命保険の月報作りと送金手続き事務を整理完了している。翌日、自宅で養鶏組合の幹部が集まって事務、A も父親に代わって参加し共に昼食、午後も事務の続きで夕方までに終了した。その後の灯火管制中の真っ暗な家でじっとしていなくてはならぬので気が滅入りムシャクシャすると述べている。父親は中国本土へ旅行とかで前月末から今月にかけて在島してない。「四日、金曜日、晴、涼。部屋掃除の後で昨日の事務の残りを午後二時まで続けた。母親は小学校校庭で防火訓練に参加、帰宅後の話によると航空隊の夫人連は上手だった。」と書いている。そして最後の灯火管制訓練、陰鬱な夜だが、今晚一晚の我慢と自分に言い聞かせている。5 日午前 10 時に防空訓練が終了した。防空訓練は 7 月 23 日から 3 日間行われているので、定期的な行事であったのかも知れない。

11 月記事 前月末から大村の鎮守である大神山神社の例大祭が始まり、小学校校庭で奉納相撲大会が行われた。「青年団の班別対抗相撲があり、妹達は行く。私はラジオきく。」とあり、翌日つまり「一日、金曜日、晴、涼。紀元二千六百年といふ佳き年の鎮守祭でありながら時々黒雲が出て来て眉をひそめさせたが幸い無事過ぎる。扇浦から親類が来る。赤飯、しるこ、昼食は父が配膳、鰯腹食べる。相撲選手権は山田氏とのこと」と記されていて、村民にとって一大イベントであったことが窺い知れる。青野正男は「大村ではこどもたちのそろいのハンテン、はち巻き姿のおみこしの行事が圧巻で、そのとき切りの樽みこしを、まちじゅうねり歩いたすえ、海に突っ込んでおわる。夜は街の四つ辻や家々に行灯をかかげ、浴衣姿の人々が逍遙する。」と自著『小笠原物語』で思い出を語っている（青野、1978）。島内の各村に神社があり日取りに違いはあるが、祭日には草相撲や出店があり参詣客で賑わった。A の生地である扇村袋澤村では 7 月末に島の発見者とされる小笠原貞頼を祭る神社の祭礼があった。これは大きな祭事であつたらしく、青野も「お祭りなど」

という項目で最初に扇浦納涼山の貞頼さんの祭りに言及し「扇浦、袋澤、小曲など各部落の若者が旭山とか八ツ瀬川とか名乗り、化粧まわしで飾って相撲甚句を歌い土俵入りする姿を生き生きと思い出す。」と述べている（青野、1978）。A も 7 月 28 日の日記に「今日は貞頼神社の祭礼で、祖母の見舞いをかねて母と妹は行く。」と書いている。翌日には二人とも在宅しているから日帰りもしくは一泊二日で行ったのかも知れない。大村扇浦間には通い船（14～5 人乗り）が数隻あって、乗船客数によるが、日に 2、3 便出ていたから、これを利用すれば日帰りで見物ができた。「当時うちも通い船をやっていて、大人一人片道 20 銭だった。船は子どもの私でも動かせたから、その運転をやって一日 10 円の稼ぎの日もあった。祭りの時の奉納相撲では青年団の会計をやって収入が 150 円位あった。兵隊に行くまでやった。祭りが終わると飲み会があってドンチャン騒ぎだった。」と扇村開拓草分けの一人である柴田栄一は語っている。

12 月記事 正月用品の準備もままならない中で、各家では新年を迎える大掃除が始まった。促されるように A の家も障子の張り替えや鶏舎の補修、台所掃除を始めた。彼は中旬より急に咳き込み始め風邪をひいたのか熱が出て臥せる日が続く。体調が許せるときに養鶏組合の事務や仕様書作りに手を付ける。しかしながら確実に病勢が進んでいると自覚し何時まで生きられるか悲観している。「防火デーとその行進が何となく葬式が歩いてゐるやうだ。」と表現し自身の人生と重ねているような記述がある。

3 日に入船し内地からリングー箱が来、後で中硫黄島の知り合いから白下糖一樽が来る。15 日に父親は袋澤村の田圃を見に行く。彼はこの島内で唯一の田圃造成に出資したらしい。村の助成金もあったが、自費で「反六十円で開墾」してもらい、相手と交渉した結果「先方のいふ通りでやること」に同意してきたとある。A は周辺の地価もこれによって上昇するかも知れないと踏んでいる。実際、父親は南崎周辺に数町歩の地所を所有していた。不動産売買やその斡旋にも手を染めていた父親は例えば要塞司令部の敷地買収に対し軍と島民の間に立って仲介もしている。大陸にいる島民の代理人として司令部と話し合い「書類提出処理済の由、後日移転登記」とか「坪六十銭で折り合いがつく。」等と日記にあることから、先の大連旅行はこの件もあったのかも知れない。

Ⅲ. おわりに

最後に水事情に触れておきたい。大村は清瀬を除き一定の水量のある河川がない。背面にある三日月山と東隣の大根山、その一部は要塞地区で、それらは共に大村川の水源になっているが、貧弱な水源（小笠原島庁、1888）であり雨後の増水以外は細流のみといった感じであった。したがって大村の人口に見合う水の供給はとても期待できない。そう

いったことから人々は井戸水や天水に頼るわけだが、当地域は他村と比べてその井戸水を得るのもまた心許なかったようだ。

Aの家ではよく飲料水の問題で故障が発生していた。例えば5、6月頃から自家の井戸水に濁りが生じ、その原因は何か探りつつも分からず困惑している記事が出る。「雨が二三日降ると井戸水が濁って閉口」とか「井戸水はどんよりと濁り、それを使用するのだから不潔極まる。昨年から雨が降るとこの井戸は濁るようになってきた。」とある。そこは20数年前に作られた掘り抜き井戸であるらしい。移転してから新しく作った井戸ではないようだ。そこで飲料水はやむを得ず近所からもらうとあり、「喜太郎さんや間瀬さんちの仲間にいれてもらおうかな。」とも書いている。

西町もそうだが、当時は向こう三軒両隣程度の住民で使用する共同井戸が一般的で、井戸の近くでは時に共用の風呂もたてられた。母島の北村ではそれは当番制で自分で風呂を沸かしたり人を雇って風呂焚きを頼んだりする場合があります。湯加減や火の始末もして夜の9時頃で終了した。沖村の主婦が毎年末に共同井戸は「鶴じいやんや伝じいやんに頼んで」井戸浚いをしたと述べている。山方の人々は乳房山から水を引いて溜め池を設け、その流水を日用にしたともいう。飲料にしても特段衛生上の支障はなかったと語っている。

Aの方では「五月八日、水曜日、蒸し暑い。この井戸は水道（みずみち）から濁った水が出るのでどうにもならない。原因は裏山に通信省で電柱を建てる際爆発をやって狂ったのではないかとはいふのである。地上からのしみ水でないらしいので幾分不潔感は薄らぐが、しかし混濁した水はどうにも気持ちが悪い。」とあって実際旬日を経ないで井戸替えをしている。

しかしながら、せっかく掃除をしたにもかかわらず雨が續くとやはり少し濁ったらしい。濁り水に接する度に彼は豊かな水に恵まれていた扇村袋澤村を懐かしく思い出していたに相違ない。事実、扇浦の柴田が「島に水飢饉がないのは扇村袋澤村の方に水が沢山あって、それで賄うことができたからだ。島民や軍人が一万もいても大丈夫だった。大村の水はまずい。」と率直に指摘している。大村の両町をまたがる大村川は涸れ川で雨が續くときに泥流が流れる程度だった。それに比べ扇浦方面は豊かな水による蔬菜栽培が盛んな農業地帯であった。河川を利用した共同洗濯場もあった。

各村では水不足を補うために共用ないし個人用の貯水槽（図7）を置いていた。大村はとりわけ多かったらしい。官舎住まいの西町の支庁職員家族は「八畳、六畳、四畳半、玄関、三畳の小部屋と勝手口」が付いた宿舎脇に必ず天水タンクがあって、濾過した雨水を沸かし使ったと回想している（久保、私信、2012）。形は方円と色々あったが塵埃が入らぬようにふだんは蓋がされていた。勿論井戸は数軒に一つあり共用であった。3月12日の日

記に「久し振りの雨、昨夜来降り続けた雨は今日一日降る。水槽もいっぱいとなり百姓にとっての慈雨であらう。」とある。木から得た水か樋水かは不明だが、この降雨を活用したコンクリート作りの施設跡は現在も残っている。人々はこういった雨水を有効に使用し農耕や洗濯、風呂、行水、食器洗い、野菜濯ぎ等生活用水として生かした。八丈島でもこういった貯水槽があったらしい。坂下の底土地域から沖村に移住した島民はこのプールをといい、大人が横たえられる程度の大きさで、八丈富士か三原山から水を引き溜めてから各戸が使用したと証言している。小笠原でも山方の住民は水箱のような湧水を引く方式で水を入手していたようだ。

井戸替えは数人の作業員が手伝いに来て家族総出で取り組んだ。既述のように母島でも「井戸は四、五軒共同で、ロース石で円筒形に組んだ枠を積みあげたもので（コンクリート製も幾つかあった）、井戸替えには毎年同じ人が来てくれる。杉の丸太の三脚の滑車に込桶を吊し、井戸を洗った古水を引っ張り上げる」方法（財団法人小笠原協会・30 周年記録誌編集委員会、1998）で行った。井戸底に貯まった水垢を全部汲み出して掃除をした。濁る原因は分からないが、水がまずいというのは帯水層の関係で多少塩分が含まれていたのではないか。この傾向は一樣でなく海岸近くでも真水が得られる場合もあった。少数の山間部の井戸は深井戸のため清掃作業も時間がかかった。北村では鉄管を使って大神宮近くの水源から各戸へ引水したが、これは既に高地の畑に水入れする方法として沖村でも多くの農家が採用していた。何れの場合でも飲料水の確保は天候や地形にも影響を受けたから、人々は不断に飲料水確保に苦労したことだろう。

文 献

網本 貢（1903）第八号字東町図，第九号字西町図，小笠原島旧土地台帳付属字限図．小笠原村．

青野正男（1978）『小笠原物語』「小笠原物語」編纂室，157-160.

外務省（1887）6．外務省報告第六号，明治十年九月上半ヶ月．国立公文書館アジア歴史資料センター．29-33.

長谷川久一（1932）容疑英国人ウエップ其ノ他ノ行動ニ関スル件，外秘第九九号．要視察人関係雑纂，外国人ノ部，第五卷，一般分割 1．国立公文書館アジア資料センター，2-4.

市村邦次（1931）英国人宣教師サミエルー一行渡航状況ニ関スル件報告（通牒）．父島憲高秘第一三号．海軍省公文備考昭和 6 年 J 警戒計画巻 1．国立公文書館アジア歴史資料センター．

- 池田 實（2012）戦前の大村地区奥村の復元図．私家版．
- 伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会（1981）『伊豆諸島東京移管百年史 上巻』東京都島嶼町村会，729-730．
- 海軍省（1927）災害費工事施工の件（6），海軍省公文備考土木 20 卷 113．防衛省防衛研究所．国立公文書館アジア歴史資料センター，924-925．
- 逓信省（1933）昭和八年度国庫補助地方庁命令航路調，各種調査委員会文書・交通審議会書類・二参考書類，国立公文書館アジア歴史資料センター，154-155．
- 内閣情報部（1939）時局宣伝資料事変下の犯罪状況．内閣情報部．国立公文書館アジア歴史資料センター，3-7．
- 内務省（1938）経済警察ノ伴侶．警保局経済保安課．国立公文書館アジア歴史資料センター，1-8．
- 内務省（1939）統制諸法令等違反取締状況調，警保局経済保安課．国立公文書館アジア歴史資料センター，157-158．
- 中楯 興（1989）『日本における海洋民の総合研究 下巻』九州大学出版会，554-558．
- 浪江洋二（1961）『白山三業沿革史』雄山閣出版，209p．
- 辻 友衛（1995）『小笠原諸島歴史日記 上巻』近代文芸社，347-348．
- 南海タイムス（1935）大村消防組頭の更迭，昭和10年4月3日．第55号．南海タイムス社．
- 南海タイムス（1939）木炭闇取引，昭和14年9月23日．第214号．南海タイムス社．
- 日本郵船戦時船史編纂委員会（1971）『日本郵船戦時船史 下巻』日本郵船株式会社，101-106．
- Office of the Chief of Naval Operations Navy Department（1944）『Civil Affairs Handbook - Izu and Bonin Islands -』Office of the Chief of Naval Operations Navy Department, 167-182．
- 小笠原対策本部（1971）『小笠原島民名簿』東京都，180-181．
- 小笠原島庁（1888）『小笠原島誌纂』警視庁監獄石川島分署．230-234．
- 小川 功（2002）『企業破綻と金融破綻－負の連鎖とリスク増幅のメカニズム－』九州大学出版会，342-344．
- 陸軍省（1937）防衛営造物新営工事の件，陸軍省密大日記 S-10-2-4．防衛省防衛研究所．国立公文書館アジア歴史資料センター，966-968
- 戦没船を記録する会（1995）『知られざる戦没船の記録－激戦の海での特攻船団－ 上巻』柘植書房，180-191．

- 高城重吉・菊池虎彦・饒平名智太郎（1957）『望郷』三光社, 94-95.
- 逋信省管船局（1940）『日本船名録』. 帝国海事協会, 256-257.
- 東京府（1929）『小笠原島総覧』一成社印刷所, 164-179.
- 東京百年史編集委員会（1972a）『東京百年史 第二卷』東京都, 1187-1207.
- 東京百年史編集委員会（1972b）『東京百年史 第四卷』東京都, 672-684.
- 東京百年史編集委員会（1972c）『東京百年史 第五卷』東京都, 138-147.
- 鵜川 馨（1993）岩井祐彦師と小笠原島聖公教会記録. 立教学院一二五年史編纂通信 9, CHAPER NEWS MAY 1993. 立教大学, 8-16.
- 山方石之助（1906）『小笠原島志全』東陽堂支店, 308-340, 409-419.
- 山崎 弘（1982）小笠原諸島の建築. 文化財の保護 14: 49-53.
- 吉田隆夫（2005）戦前の大村地区東西両町の復元図. 私家版.
- 財団法人小笠原協会・小笠原諸島返還 30 周年記念誌編集委員会（1998）『小笠原諸島返還 30 周年記念誌』小笠原諸島返還 30 周年記念事業実行委員会, 192-193.